AALA ニューズ１０２号（ウクライナ特集第３弾）の内容紹介

編集部

最初から徹頭徹尾悪いのはプーチンです。それは間違いないのですが、ウクライナ政府に問題はないのか、国民にこれだけの犠牲が出ているのに、なぜ戦闘を続けるのか、これも問題ではないでしょうか。

彼我の力の差を見れば、「出てこい二ミッツ、マッカーサー」は指導者としてあるまじき言動です。第一いますぐ NATO に加盟しようと言っているのはウクライナ政府だけなのだから、そんなことにこだわるのは無責任でしょう。

少しづつ落とし所が見えてきました。不満が残るにしても、そちらに進むしかありません。いま大事なのは人間の命です。

１０２号の内容を紹介します。今号は６本の記事が掲載されます。その多くが平和の方向を示唆したものです。

1. 浅井基文「ロシアのウクライナ侵攻_問題の所在と解決の道筋」

浅井論文は、著者のご快諾を得てブログから転載したものです。交渉を軌道に乗せるためには、たとえ納得できなくてもロシア側の論理を理解する必要があります。
論文ではこれを「**ロシアがウクライナ軍事侵攻を余儀なくされた原因**」と括って、ポイントを押さえて簡潔明瞭に説明されています。

2. ウクライナ_ラマポーザ南ア大統領のメッセージ

南アが国連総会でウクライナ決議に棄権したとき、国内からも批判の声が上がりました。これに答えてシリル・ラマポーザ大統領が説明しています。非常に条理をわきまえた立派な考えで、さすがに長年アパルトヘイト反対の運動を続けてきただけのことはある、こういうのを筋金入りの平和主義というのだな、と感服しました。
世間ではケニアやガーナの代表の演説が脚光を浴びているようですが、南アの意見は、地味ではあるけれどもとてもだいじな中身を含んでいます。

3. 環球時報「カラー革命と米帝国主義」

環球時報の編集部が特別チームを作って書いた記事です。2011 年チュニジアで開始され、世界に広がった「カラー革命」を一覧できる、いま格好の読み物です。
これを読むとプーチンの“こころの内”が分かりそうな気もしないでもありません。もちろん共感するつもりは一切ありませんが、停戦・和平交渉に際しては念頭に置いておくべきでしょう。

4. オープン・デモクラシー「ウクライナから西側左翼への手紙」

これを読むと、さすがに暗澹とした気持ちになります。むかし観たアンジェイ・ワイダの映画「灰とダイアモンド」の世界です。あまりのショックに世界が見えなくなって、「ホワイトアウト」しているのかも知れません。
その気持ちに共感しつつも、「ロシアがウクライナ軍事侵攻を余儀なくされた原因」についても思いは必要でしょう。
この記事が書かれたのが侵攻開始直後なので、相当変わって来ている可能性もあると思います。それは次の記事の主人公シェリアジェンコの思考の振幅を見ればわかります。

5. Truth Out「ウクライナ_戦時下の左派の人々」

シェリアジェンコは平和主義者というより高僧の雰囲気を漂わせています。反戦活動が厳しくなったとき、最後の選択として非戦を貫くという決意はズシンと心に響きます。
私は、この人はドゥホボール教の非戦思想を引き継いでいるのではないかと、密かに思っています。これについては「ドゥホボール教の非戦思想」を御覧ください。

6. 大村哲「ロシアのウクライナ侵略戦争～経済的実態を中心に」

前回に続いて会員の投稿です。経済分析を中心とした労作です。AALA ニュースは多様な意見を尊重したいと考えています。